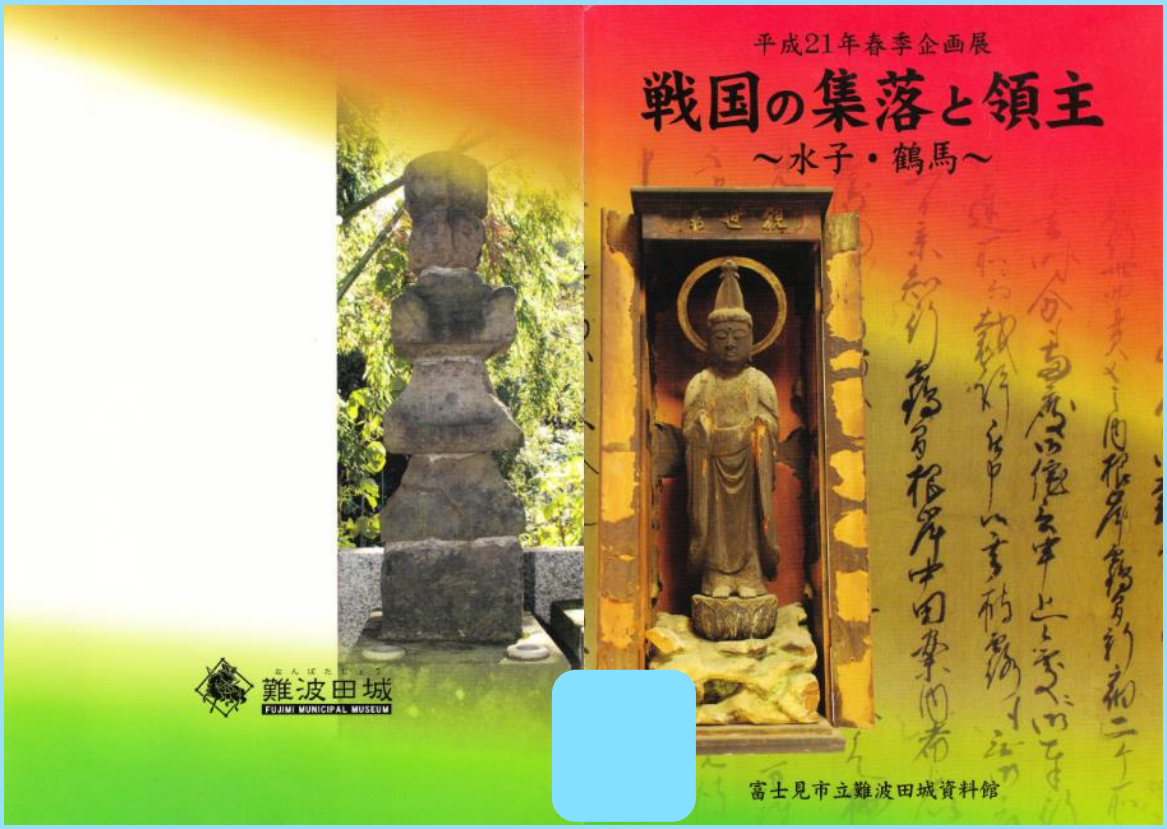

裏表紙　　表紙

書　　名：　平成２１年　春季企画展

戦国の集落と領主

－ 水子・鶴馬 －

出版年月：　2009(平成21).3
著　　者：　富士見市立難波田城資料館
本サイズ：　Ａ４サイズ(210×297mm)
ページ数：　２３Ｐ

※当企画展の図録は難波田城資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索　コンテンツ：

・開催にあたって
・目次・例言
・１　戦国時代の富士見
・２　村落地域の町場～市と宿～（１ページ抜粋）
・３　上田氏と水子・鶴馬（１ページ抜粋）
・４　伝承と太田氏（１ページ抜粋）

開催にあたって

近年、戦国時代を中心とした歴史小説の刊行やドラマの放映で、著名な武将への注目が集まるようになりました。しかし、同じ中世でも地域への関心は低いのが現状です。それは、歴史の解明が進んでいないことや資料不足が原因なのでしょう。富士見では、歴史の解明という部分において、早くから発掘調査が行われ多くの成果を報告してきました。また『富士見市史』も刊行し、考古・歴史・民俗を含めた富士見の歴史を知ることができます。

富士見市内には、幾つかの中世遺跡や遺物が存在し、当時の人々の生活が想像できます。史料にも、河越（川越市）や松山（東松山市）、岩付（さいたま市岩槻区）などの拠点地域以外にも、富士見市周辺の難波田、水子、鶴馬、勝瀬、羽根倉、大久保（富士見市・ふじみ野市）、宗岡（志木市）、大井郷（ふじみ野市）、大和田（新座市）、清戸（清瀬市）、などの地名が記されています。

そこで、今回の企画展では、古文書・古記録、さらには考古遺物や宗教遺物などの資料をもとに、富士見の水子・鶴馬という地域に焦点をあて戦国時代の集落像に迫ってみたいと思います。

なお、展示会の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました各位・各機関に、厚くお礼申し上げます。

平成21年３月

富士見市立難波田城資料館

目　次

開催にあたって
目次・例言
1　戦国時代の富士見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　村落地域の町場～市と宿～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　（1）水子
　（2）鶴馬
3　上田氏と水子・鶴馬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
4　伝承と太田氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
5　中世の痕跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　（1）　領主とかわらけ
　（2）　地下式坑の存在
　（3）　打越遺跡の動物埋葬

展示資料一覧
主要参考文献一覧

例　言

1　本書は、平成21年３月15日（日）から５月17日（日）まで開催する平成21年春季企画展「戦国の集落と領主－水子・鶴馬－」の展示図録である。
2　本書と展示の構成は一致せず、図版の順番と展示資料番号も異なる。
3　展示資料のうち本書に収録していない、または本書に収録し展示資料にないものもある。
4　本企画展の企画・構成及び企画展示図録の編集・執筆は、富士見市立難波田城資料館職員石塚宏明が行った。
5　展示及び図録の写真は、撮影を石塚が行ったが、一部は資料借用先及び所有者から提供を受けた。

協力者（敬称略）
石村豊龍、岡田賢治、小室開弘、古山祥道、道祖土武、関根英沅、高崎直成、田中信、中島千代子、平野寛之、藤波政男、柳沢健司、横田正志
協力機関（敬称略）
川口市遺跡調査会、川口市教育委員会、川越市教育委員会、川越市立博物館、埼玉県立文書館、浄円寺、性蓮寺、ふじみ野市教育委員会、妙賢寺

1　戦国時代の富士見

室町時代のはじめ、河越荘や富士見市周辺は室町幕府の所領になっていました。関東の治安を担う関東管領兼武蔵守護は山内上杉氏でしたが、将軍が足利義政（1436～1490）になると扇谷上杉氏を重用するようになります（落合2005）。そして、河越荘の管理を扇谷上杉持朝（1418～1467）に任せたことで、周辺の支配にも影響を及ぼしたと考えられます。その後、持朝は武蔵守護代の大石氏等とも親戚関係を結び、地域の武将達も扇谷上杉氏に従うようになりました(杉山1975)。扇谷上杉家は、太田道灌（1432～1486）等の活躍により持朝の頃には城を築き、河越を中心に勢力を保持しました。

15世紀後半には、多くの戦いが繰り広げられ、扇谷上杉定正（1443～1494）の業績を列挙した「上杉定正状写」(古証文）の訓戒では、定正の嫌う城館の立地条件などが細かく書かれ、戦いの拠点となる城館の建設が行われていた様子が窺えます。山内上杉氏の策略により道灌に謀反の疑いがかけられ、定正が道灌を暗殺した後、関東の治安はさらに不安定になりました。

大永５年（1525）７月30日、河越城主であった扇谷上杉朝興（1488～1537）は、北条氏康軍の関東進出を「他国の凶徒蜂起せしむ、関東破滅」と表現し、上野国（群馬県）箕輪城（高崎市）の長尾為景に助けを求める手紙を送ります（「上杉朝興書状」）。この頃、河越城（川越市）や松山城（比企郡吉見町）周辺の戦いは激化し、富士見市内を治めていた扇谷上杉氏家臣の難波田氏一族も、戦いに奔走しました。

富士見市は、戦国時代末期において後北条氏の支配の後、太田・成田両氏による後北条家への反乱（永禄4年「北条氏康書状」箱根文書）を経て、再び後北条氏の配下になったようです。その後、後北条氏が豊臣氏の勢力に淘汰され、統治を任された徳川氏の家臣が集落を発展させたと考えられます。

このような状況の中、富士見市内の情勢も刻々と変化し、集落と領主の関係も変わっていきました。領主も扇谷上杉氏の滅亡後、永禄年間に上田左近や勝瀬孫六、大窪丹後、同内匠助、同勘解由（『小田原衆所領役帳』）、その後、天正年間には上田周防守(註1)、原兵庫助（「原兵庫助申状」)、芝山小兵衛、太田清政、多門成正、朝比奈昌親（「所領宛行朱印状」）と、後北条氏家臣から徳川氏家臣へ領主が変わっていく様子が窺えます。

それ以外で、戦国時代の富士見市に関わる人物をみると、中氏（註２)、立川氏、深井氏など数える程度しか登場せず、どの家臣も岩付城主の太田氏房（北条氏房）に仕えていました。

註

1　『性蓮寺過去帳』に難波田城主であったとされ、『館村旧記』の中野組之事では、「城主の隠居所或ひは連枝の住みたまふ所ある也。是を別所といふ。已に難畑城の別所は水子村の台にあり」と記しています。館村は、現在の志木市館にあたります。

2　古尾谷八幡神社（川越市）の棟札と下南畑（富士見市）に存在した西蔵院の中家位牌に同じ仲（中）筑後守の名前があります。

1ページ抜粋

2　村落地域の町場～市と宿～

村落の中の町場は、史料に登場しない限り、その場所や実態が見えてきません。水子・鶴馬地域には小字名に「宿」や「町」、「本郷」など、村の中心的場所を意味する字名が使用されている地域がありますが、中世から使用されているのか、近世に入ってから使用されているのかは不明です。そこで、中世考古学と文献史学の観点から村落の町場を探ってみようと思います。

(1)水子

水子は、14世紀後半（約640年前頃）から地名が史料に登場し、「鎌倉道」と呼ばれる鎌倉街道の枝道が台地沿いにあります。道沿いの寺社には今でも板碑、五輪塔、宝篋印塔など、中世に作られた石碑が残され、発掘調査からも道沿いの地域に人々の生活した跡が確認できます。

江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』では、水子に中世から大應寺や性蓮寺などの寺があり、上田氏一族が領主だったと記されています。

水子の市以降に書き継ぎがあるため、応永22年の段階には水子の市立が行われていたと考えられます。さらに、水子の市立には羽倉彦次郎なる人物が関わっていました。羽倉氏に関しては詳しい資料がありませんが、羽根蔵の渡し（志木市）付近に在住した人物であると考えられます。羽根蔵の渡しは、荒川（旧入間川）にある渡しで、鎌倉街道上道と岩付（さいたま市岩槻区）方面を結ぶ道の途中にあります。羽根蔵の渡し付近では過去に戦闘も行われ、古くから通り道になっていたようです（「高麗経澄軍忠状」）。

また、さいたま市岩槻区に残っていた「市場祭文」にも市立に関わる関根権重郎という人物がおり、当時の市立てには、市を仕切るための人物が地域ごとに存在したと考えられます。

水子の市に関する記録は、「市祭記録」のみですが、他にも周辺地域の様子を窺える記録があります。京都聖護院の道興が書いた日記『廻国雑記』（『群書類従』）は、本山派の布教のために関東に行き、その旅路を書き記したものです。下記のように、道興は柳瀬川や新河岸川付近を通り、文明18年（1486）から翌年（1487）正月の間、大塚の十玉坊に泊まりました。

史料で水子がはじめて登場するのは、「市祭記録」でした。「市祭記録」は、市立（市場開設）にあたって書かれた記録で、「本書ハ、延文六年辛丑九月九日、今書応永廿二年七月廿日」とあり、延文6年（1361）から応永22年（1415）頃に市立が行われたことを示しています。市は伊勢天照大神・住吉大明神のはかり事であるとし、天竺・唐で市が始まり、足立郡氷河大明神（大宮氷川神社）など国内の主要寺社で行われるようになったと記しています（「市場祭文」武州文書）。市を立てた場所を見てみると、次のように武州入間郡水子が確認できます。

【史料1】「市祭記録」

（前略）

武州足立郡大門市祭成之

武州入間郡水子郷市立時羽倉彦次郎市祭成之

是ヨリ書ツキノ様子見ユル

武州足立郡かうのす市祭成之

（後略）

【史料2－1】『廻国雑記』

宗岡といへる所をとをりけるに、夕の煙を見て、夕けふりあらそふ暮を見せてけりわか家々のむね岡の宿

【史料2－2】

さゝいをたちて武州大塚の十玉が所へまかりけるに、江山いくたびかうつりかはり侍りけん、其夜のとまりにて、…

（後略）

【史料2－3】

十玉か同宿十仙といへるもの、連歌に数寄侍りて、切々に興行し侍りけるとなん、・・・

【史料2－4】

此のほどながへ住なれ侍りける旅宿をたちて甲州へおもむき侍りけるに、坊主ことのほかになごりおしみ侍りければ、・・・

3　上田氏と水子・鶴馬

上田氏は、扇谷上杉氏の重臣で、相模国に所領を持っていました。扇谷上杉氏の武蔵国入国を機に河越周辺の地との関わりを持ったとされています。古文書中では、天文年間（1532～1555）に上田朝直（？～1582）の代から確認できます。上田氏一族は、日蓮宗との関わりが深く、南妙法蓮華経と彫られた板碑や氏寺の日蓮宗浄蓮寺墓石、日蓮宗寺院の過去帳などに上田氏の名前が見えます。

上田氏と当市に関連する古文書は、未だ発見されていないため、記録類から難波田氏との関係を含めて探ってみます。

【史料１】『太田家譜』

永禄二年氏康謀ヲメグラシ三樂松山城ニ籠置所ノ上田闇礫齋逆心サセ氏康ニ心ヲ通シ氏康之人数ヲ引入テ松山落城ス其時家臣廣澤尾張守忠信入道道正モ討死ス上田逆心ノ事闇礫齋ハ難波田弾正入道善吟ガ甥也善吟婿養子トセン事ヲ廣澤尾張守忠信ニ密談ス忠信云養子ヲセントナラバ太田源五郎可然ト云此事ヲ闇礫齋聞テ廣澤エモ源五郎ニモ遺恨多ク依之北條ニ通シ落城ニヲイテハ則與ント約シ謀ヲ定牒シ合氏康ノ人数松山城ヲ圍ムト云トモ

この記録は、太田資正の息子資武が聞き伝えた記録です。闇礫斎は時期の一致から考えて上田朝直と考えられ、闇礫斎の号は案独斎の誤記であるようです（藤木1985）。この内容によると、闇礫斎は難波田善銀（吟）の甥にあたり、闇礫斎は難波田氏の娘との結婚を望んだようです。しかし、廣瀬忠信の進言により、善銀は岩付の太田源五郎（後の太田資正）に娘を嫁がせました。おそらく、善銀の狙いは、源五郎に家督を継がせることで松山・岩付という勢力の安定を図ることだったと思われます。難波田善銀の死後、太田資正（別名三楽斎（旧源五郎））は自家の事情で難波田の家督は継げませんでしたが、松山と岩付を治め、難波田氏の思惑通りに至りました。しかし、太田方として松山城を任された上田朝直は、資正を恨んでいたため、後北条氏と内通し、松山城を奪いました。これにより松山城の統治下であった比企地域を治めるようになります。

【史料２】『小田原衆所領役帳』

一　　上田左近

百七十貫文	入東鶴間	乙卯検見
百五拾貫文	入東難波田	乙卯検見
百貳拾貫文	同水子同	
貳拾五貫文	同葛袋同	
六貫九百六拾二文	同勝内藤澤分同	
六貫文	同福岡内難波田分	

以上四百七拾七貫九百六拾二文

此内二百卅九貫文　自當年改而被仰付半役

但人數着到・出銭ハ四百七拾七貫九百六拾二文之辻ニ可懸　　（後略）

上田左近は、後北条氏家臣団の小机衆に属する武将です。乙卯（弘治元年（1555））に行われた検見の際、入東郡の鶴間、水子、難波田、福岡内難波田分の地を所有していました。知行高では、同族の安独斎や豹独軒よりも広く、上田氏の中でもかなり有力な人物でした。

では、上田左近とはどのような人物だったのでしょうか。上田左近の登場する史料は、日蓮宗妙賢寺（東松山）に残る「日現十界曼荼羅」と『妙賢寺過去帳』です。

【史料３】「日現十界曼荼羅」

上田左近大夫

源朝直建立

鶴間山

栖林院常住

【史料４】『妙賢寺過去帳』

大檀那栖林院殿妙光日開大善尼　天文十九年三月十五日　上田左近太夫源之朝直公

母　上田　　七十九歳

1ページ抜粋

4　伝承と太田氏

現在、鶴馬の諏訪神社では祭礼の際、３匹の獅子舞が奉納されています。その諏訪神社の獅子舞には、次のような伝承が残っています。

【伝承】

昔、太田道灌が江戸城の外城を築くため此の地方を検地した際、疫病が流行して苦しむ者が続出した。

そこで家来に命じて京から三頭の獅子面を買い求め、和田戸（渡戸）の名主、繁右ヱ門方で獅子舞を教え、鶴馬の諏訪大明神の社頭で、悪疫退散の獅子舞を奉納させたところ、疫病はにわかにおさまったという。

それ以来有名となり、病魔退散厄除けばらいにあちこちへ出張して舞ったが、明治の初めごろから神社の例祭にのみ行われることになったと言われる。

（『富士見のふるさと昔ばなし』資料１）

この伝承によると、太田道灌が鶴馬付近を検地し、獅子舞を教えていったとされています。太田道灌は15世紀中頃に活躍しました。上杉持朝が道灌等に命じて江戸城（千代田区）と河越城(川越市)を築城したのは、長禄元年（1457）４月でした(「鎌倉大草紙」)。伝承によれば、おそらく、その頃に鶴馬付近に来たことになります。しかし、それを直接示す史料がなく、また三匹獅子舞の室町時代の存在を示す史料がないため、それを実証することはできません。では、なぜ上記のような伝説があるのでしょうか。

ひとつは、河越城との関係があります。江戸時代の富士見市域は川越藩の一部でした。そのため、河越城を築いた名将である道灌との深い結びつきを考えたのでしょう。その一方、太田道灌は、扇谷上杉氏の重臣でした。15世紀中頃には扇谷上杉氏は河越（川越市）に拠点を置き、武蔵国南部へ勢力の拡大を図っていきました。それは、足利将軍家と扇谷上杉氏の関係にも見え、『寛正三年（1462）三月六日付足利義政御教書写』に「代々忠節者」などと書かれています。その関係により扇谷上杉持朝は足利将軍家より河越荘を預け置かれました(落合2005)。そのため、太田道灌が築城のため訪れたとされたのかもしれません。

次に、太田道灌死後の岩付太田氏と富士見市内の関係を考えてみると、『太田家譜』にあるように、難波田善銀は娘を太田資正（源五郎）に嫁がせています。資正に嫁いだ娘は、法名を陽光院芳林妙春大姉と言いました(芳林寺位牌)。そして、その間に生まれた子供が氏資と女子一人であり、女子は忍の成田氏長に嫁いでいます（「太田氏系図」）。

資正は、『小田原衆所領役帳』には、他国衆として入東郡古尾谷（川越市）などの富士見市付近の土地を所有していました。

鶴馬諏訪社の獅子舞（撮影　富士見市教育委員会）
「お諏訪さま」の祭礼に奉納されています。